

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 畠中 愛美

論 文 題 目

『平家物語』諸本に見る人物造型の独自性

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	塩村 耕
委員	名古屋大学教授	近本 謙介
委員	名古屋大学准教授	大井田 晴彦

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、『平家物語』の多彩な諸本が持つ多様性と流動性こそが、作品に多くの世界観や解釈をもたらしている点に注目し、各諸本が有する独自の本文や表現を取り上げ、それが人物造型や場面にどのような影響を与えているのかを、具体的に検証しようとする。そして、各諸本の編者にどのような意図があったのかについて考察を加え、『平家物語』諸本という群を、個として見る意義を提唱する。

第一章「「ゆらふ」考」では、覚一本「富士川」で、坂東で交戦することを望む大將軍維盛に対し、清盛の委任を背景に、それを留める侍大将忠清の諫言に対し、維盛が「力及ばでゆらへたり」とする表現に着目する。これを単にためらったと見る従来の解釈に対し、古辞書や同時代の用例から「ゆらふ」の語義に考察を加え、相反するエネルギーを持つものが膠着状態におちいった状態を示す表現とし、維盛にとって不本意な状況で、強い反発を内に秘めているとする。意志の弱い消極的な人物と見る維盛の人物像に対して、別の見解を呈している。

第二章「城方本の執筆意識」では、語り本系の一本、城方本に描かれる巴、小宰相、建礼門院右京大夫、内裏女房、維盛北の方、建礼門院を取り上げ、諸本における描かれ方と比較する。その上で、城方本では、別離を余儀なくされて、残された女性への思い入れが深く、場面の展開に工夫を加え、読み手が女性に憐憫の情を抱きやすいように工夫されている傾向があるとする。

第三章「南都本の逆櫓論争の扱い」は、読み本系に属しながら、巻によって本文系統の異なる特殊な本である南都本について、逆櫓論争をはじめとして、景時の義経に対する態度の描写を検証する。そこでは景時が武勇に優れた思慮深い人物に造型されており、頼朝が義経を追討するにいたることを、義経側にも問題があったように記述しているとする。

第四章「南都異本における平重衡の造型」は、読み本系の南都異本について、独自本文の見られる「海道下」と「千手前」を取り上げる。道行文において、同本に見られる地名の多さは、重衡の沈鬱な旅路を象徴し、池田の宿での侍従との出会いが、重衡に慰撫をもたらしたために、それ以降の道行では地名が少なくなるとする。そして、重衡が千手、伊王と交流する件は、王朝物語的な趣向を踏まえ、重衡の貴種性を強調する意図によるとする。

第五章「『源平闘諍録』における義経像」では、読み本系の『源平闘諍録』に見える義経の描写に注目する。そこでは義経と頼朝が、平家に対する私怨を抱く同志的な存在として語られ、また梶原景時と義経との間に確執がなく、したがって頼朝と義経との葛藤が描かれなるとする。その結果、義経の悲劇の英雄像は弱められ、頼朝の弟に過ぎない義経の存在感は小さくなったとする。

以上の諸論を通して、諸本が独自の世界観をもつことを具体的に提示した。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

第一章では、やや耳慣れないことばとなった「ゆらふ」について、古辞書、軍記類をはじめとする同時代の用例を博搜駆使して、本義の解明をはかり、せめぎあう力が拮抗した状態を表した語という。これについて、同じ場面で表記を「洵たり」「汰たり」とする本があり、これらも「ゆらへたり」と読むべきで、これに「ひかへたり」の傍訓を付す本があるが、それは文脈にひかれて誤読したものと見なされる。結論として、論者の解釈は納得され、維盛を単に意志薄弱で消極的な人物とする従来の読みは訂正を要するようと思われる。これは竟一本の独自性を示すには至っていないものの、諸本の性格をきめ細かく分析することによって得られた結論と評価できる。

第二章は重要な六人の「取り残された」女性を取り上げ、諸本と比較して城方本では、素材を取捨選択して、ことさらに思い入れをもって描写していると指摘する。城方本編者の独自の創作意識の一端を解明している。

第三章も諸本を比較した上で、南都本が、義経を讒言するに至る梶原景時について、その過程をことさらに丁寧に描いている点を指摘する。確かに南都本では逆櫓論争の場面など、義経の尊大さや無謀さが強調されており、そのことは武士道のテキストとしての『平家物語』に、多様なあり方の可能性のあったことを示唆している。

第四章は南都異本における重衡海道下りを取り上げ、まず道行き文での独自地名の増加を指摘し、それが『伊勢物語』業平の東下り以来の文学伝統を踏まえ、重衡の心象風景を象徴したものとする。そして、重衡を歓待するのに殊更に二人の女性が配されたのは、やはり王朝物語以来の「女はらから」の話型によると、的確に指摘している。確かに諸本ごとに異なる人物像を、きめ細かく読み取ることの重要性を、南都異本は示唆している。

第五章では『源平闘諍録』を取り上げ、義経と頼朝が平家を討つ点に私怨性が強く、その絆で両者が結ばれているとして、両者の葛藤が描かれない点について、独自性を指摘する。景時と義経との関係性も同様であり、ひいては義経の英雄像を弱めることになったが、そのことは第三章と同様、武士道のテキストとして『闘諍録』がどのように読まれたかという問題につながってくるようと思われる。

諸本を比較するという論述形式上、やむを得ない面もあるが、諸本の異同をめぐる個々の問題に終始して、現象の指摘にとどまっており、諸本論全体を統合する視点が乏しいことは、残念な点である。しかしながら、それは今後の研究の蓄積により解決されるべき長期的な課題と考えられる。全体として、複雑な諸本をかかえる『平家物語』の新たな解明に、一石を投ずる研究と高く評価することが出来る。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。